

総合科学技術会議 第67回評価専門調査会  
議事概要

日 時：平成19年8月6日（月）15：41～17：43

場 所：中央合同庁舎4号館 共用第4特別会議室（4階）

出席者：奥村会長、相澤議員、薬師寺議員、郷議員、原山議員  
青木委員、伊澤委員、北澤委員、小舘委員、小林委員、齊藤委員、  
田渕委員、中西委員、古川委員、本田委員、陽委員

欠席者：本庶議員、庄山議員、金澤議員  
垣添委員、笠見委員、加藤委員、久保田委員、榊原委員、手柴委員、  
宮崎委員

事務局：岩橋審議官、天野参事官他

- 議 事：1. 開 会  
2. 評価専門調査会（第65回、第66回）議事概要（案）について  
3. 国家的に重要な研究開発の評価「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用について」（議事1）  
4. 大規模研究開発の事前評価のフォローアップについて（議事2）  
5. 閉 会

（配布資料）

- 資料1－1 評価専門調査会（第65回）議事概要（案）について  
資料1－2 評価専門調査会（第66回）議事概要（案）について  
資料2 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」について（原案）  
資料3－1 大規模研究開発の事前評価のフォローアップ結果（案）  
資料3－2 実施者説明及び評価専門調査会における意見（X線自由電子レーザーの開発・共用）  
資料3－3 実施者説明及び評価専門調査会における意見（戦略的基盤技術高度化支援事業）  
参考資料1 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」の評価について  
参考資料2 評価検討会運営要領  
参考資料3 秘密情報の取扱について  
参考資料4 大規模研究開発の事前評価のフォローアップについて

参考資料5 平成17年度に総合科学技術会議が実施した大規模研究開発の事前評価の概要

(机上資料)

- 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」について  
(平成17年11月28日)
- 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」のフォローアップ結果(平成18年10月5日)
- 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」第1回評価検討会 文部科学省提出資料(平成19年6月21日)
- 「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」第2回評価検討会 文部科学省提出資料(平成19年7月6日)
- 総合科学技術会議が実施する国家的に重要な研究開発の評価「X線自由電子レーザーの開発・共用」について(平成17年11月28日)
- 「X線自由電子レーザーの開発・共用」研究開発の概要  
(平成19年7月5日)
- 「X線自由電子レーザーの開発・共用(国家基幹技術)」事前評価における指摘事項等への対応状況(平成19年7月5日)
- 総合科学技術会議が実施する国家的に重要な研究開発の評価「戦略的基盤技術高度化支援事業」について(平成17年11月28日)
- 「戦略的基盤技術高度化支援事業」の概要(平成19年7月5日)
- 「戦略的基盤技術高度化支援事業」指摘事項への対応状況について  
(平成19年7月5日)
- 国の研究開発評価に関する大綱的指針(平成17年3月29日)
- 科学技術基本計画(平成18年3月28日)
- 分野別推進戦略(平成18年3月28日)

議事概要：

【奥村会長】 それでは、本日の調査会を開催させていただきますけれども、お手元の議事次第にございますように、大きく2つの議題がございます。国家基幹技術——スーパーコンピュータの評価と、大規模研究開発のフォローアップでございます。初めに、事務局から配布資料の確認をお願いいたします。

<事務局から配付資料の確認が行われた。>

○評価専門調査会(第65回、第66回)の議事概要について

平成19年6月1日及び平成19年7月5日開催の評価専門調査会（第65回、第66回）の議事概要（案）について確認が行われ、承認された。

○国家的に重要な研究開発の評価「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用について」（議事1）

【奥村会長】 それでは、次の議題でございますが、「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」の評価報告書案について議論を進めていただきたいと思います。この研究開発につきましては、総合科学技術会議において平成17年度に事前評価を行ったところでございます。また、平成18年度には事前評価の際の指摘事項に対するフォローアップを実施いたしました。この3月の専門調査会でもご説明しましたとおり、これらの中で、システムの概念設計が終了した段階で、フォローアップの際に確認できなかった対応状況の確認及び評価を行うこととしてまいりましたけれども、今回、開発主体でございます理化学研究所における概念設計及びその結果に対する文部科学省による評価が完了したことを受けまして、総合科学技術会議評価専門調査会で評価を実施することになったわけでございます。

審議の進め方でございますけれども、評価専門調査会のもとに評価検討会を設け、この6月以降、2回にわたりヒアリング及び検討を重ねてきたところでございます。そこで、本日は評価検討会の検討結果を踏まえ、評価専門調査会として評価報告書の取りまとめを行うこととしたいと考えてございます。それでは、評価検討会の座長を務めていただきました伊澤委員より、検討会において取りまとめられました評価報告書（原案）について、ご報告をお願いしたいと思います。

【伊澤委員】 それでは、資料2に基づきましてご説明させていただきます。表題にございますように、「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」についてでございます。

ページをめくっていただきまして、1ページに「はじめに」という欄がございます。ここに記述されております内容は、ただいま奥村会長がご説明された内容、あるいはこれからご説明いたします評価結果などと重複するところが多いので、時間の関係上、省かせていただきます。

3ページをお開きください。3ページに評価の実施方法が書いてございます。1番目に、評価対象でございますが、今、申しました最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用ということで、平成18年度から平成24年度までの7年間、国費総額1,154億円ということで計画されております。評価の目的は、ここに記載されているとおりでございます。

第3項に、評価検討会の構成について書いてございます。評価専門調査会の有識者議員1名、専門委員5名が中心になり、さらに外部から当該分野の専門家、有識者5名の参加を得て評価検討会を設置いたしました。

評価時期でございます。先ほど会長からもご説明ございましたが、平成18年10月に実施いたしましたフォローアップにおいて、概念設計作業が終了した後、速やかに評価を実施することとしたということで、それを踏まえまして、文部科学省による評価の終了を待ち、直ちに評価を実施したところでございます。

評価の方法は、第5項に書いてあるとおりであります。少し補足いたしますと、合計2回、時間にいたしまして5時間以上にわたるヒアリングあるいは討論を行いました。評価検討会に提出されました資料は、お手元にも配布されておりますが、参考の4番あるいは5番にリストとして載っております。大変膨大なもので、会議当日だけでなく、各委員から後日、質問、コメント等を提出していただきました。また、資料の一部は、ご紹介ありましたように文部科学省の秘密指定を受けておりまして、会議終了後、回収されてしまいましたので、一部委員は後日、文部科学省に出向き、再度閲覧してコメント等を作っていたいております。

こういったものをまとめて作りまして、今回の資料2でございます。文部科学省への質問内容、評価の論点整理、各委員から出ました評価コメントは、補足資料の1、2、3に記載されておりますので、具体的な論点はこれをご覧いただくとよくおわかりいただけると思います。

それでは、5ページに移らせていただきます。5ページに評価結果が書いてございます。ほぼ全文を読み上げさせていただきますと思います。

<以下、伊澤委員により資料2の3. 評価結果（5ページ以降）が読み上げられた。>

【伊澤委員】以上が評価結果でございます。この後、補足資料といたしまして、具体的に検討会で議論されました内容が相当細部にわたって書いてございますが、この部分のご説明は省略させていただきます。具体的なご質問等があれば、これらを参照してご説明することにしたいと思います。

【奥村会長】それでは、ただいまご説明のありました評価報告書の原案につきまして、ご意見等ございましたらいただきたいと思っております。

【北澤委員】委員の1人でもある郷先生からも指摘がありまして、私もこれを読ませていただいて、できれば1つの文章をつけ加えさせていただけないだろうかというご提案も含めてのコメントです。

前の地球シミュレータのときにも、周辺人材の育成という点でもう少しやっておけば良かったかなといった反省が何点か、我々JSTでもプロジェクトを作っておりまして、そういうことが感じられる面があるのですが、今回のスーパーコンピュータも、さらにその意味で広いユーザー及びその周辺の人材育成を図ることを、この中に明示していただくことが非常に有用なのではないか。そういう観点から見ますと、実はあちこちにその点が指摘されているのですけれども、できれば、例えば7ページ、②の下から5行目に「研究開発課題を明確にすべきである。また、関係府省とも連携し、エンドユーザーとなる大学・企業等のニーズを把握し、」の後に、アプリケーションに行く前に「関連分野の人材育成を積極的に図りつつ、」といった言葉を入れて、そして「アプリケーションの拡大を促進するための取組みを、」というような感じで続けていただくと、特に大学も含めて、よりスーパーコンピュータのプロジェクトを幅広くサポートしていくという感じの点から、そういう一文を入れていただくと非常に力強いものになるのではないかと感じておりまして、その辺、ご質問とともに提案させていただけたらと思います。

【伊澤委員】人材につきましては、8ページの④に書いたつもりではありますが、ご指摘のように、スーパーコンピュータに限らず、こういった大型装置を使う人材、関連する人材を育成するのは大変大事なことで、ここにありますような形でまとめたのでありますが、先生ご指摘のように②にもつけ加えることは、私は結構だと思います。

【齊藤委員】今のことに関して、これは本当にどうしたいのかという……。昔からスーパーコンピュータに関しては2つ意見があって、1つは、「スーパーコンピュータ、ハードがそこにあり、あとは使いたい人が勉強して使いなさい。」要するに、本当のアプリの人がスーパーコンピュータのことを勉強しなさいという考え方。もう一つは、「アプリの人は本当のアプリをちゃんとやりなさい、スーパーコンピュータの使い方はそれぞれの専門家がやるのだ。」ですからアプリの人は、例えばバイオの人もライフサイエンスの人も、スーパーコンピュータだといって特別何か——もちろん、自分のやることを数値化するというようなことに関して、当然そういう人は必要なわけで、そういう意味での人材は大事かと思いますが、日本で長い間スーパーコンピュータが失敗しているのは、そういうアプリの人達にスーパーコンピュータを勉強させようとして、それでユーザー層が育たなかった。

私が主張したのは、日本ではサポート人材というものがあらゆる面で軽視されているわけで、このスーパーコンピュータに関して、例えばアメリカのスーパーコンピュータセンターで言うと、日本の10分の1ぐらいしか能力のないコンピュータセンターに日本の10倍ぐらい人がいて、サポートしている、そ

れがアメリカのスーパーコンピュータを有効に活用させているということで、地球シミュレータにおいても決定的にその面がなかった。このスーパーコンピュータについては是非、昔のようにユーザーが勉強してやりなさいということに頼らないで、ちゃんとそういうサポートを作りなさいということをして私は平成17年から言い続けていて、今度の間接評価のときも、ほとんどその問題に触れられていなかったことを私は大変残念に思いました。

そういう意味で、日本ではとても難しいことで、ですから4ページの④のような書き方をしていただいたということをごさいますて、エンドユーザーが頑張るから④は要らない、エンドユーザーに頑張らせるのだというようなことをスーパーコンピュータの人達はよもや思わないでいただきたい。そういう意味では、今の関連分野の人材というのをどうとるかによるかと思いますが、スーパーコンピュータの専門家がいて、そちらが専門なので、その人達が十分アプリケーション分野の人とコミュニケーションを図りつつ、スーパーコンピュータを使い込むというのが、世界的に見てもスーパーコンピュータの標準的な使い方である。日本ではその昔の大学のスーパーコンピュータの時代から、地球シミュレータの時代も決定的にその分野が欠けている。それを十分文部科学省には、あるいはこのプロジェクトには十分検討していただかないと、そういう意味で再び失敗を繰り返すことになる。「そちらの方は要らない」と彼らが思わないような文章にしていただきたいというのが私のお願いでございます。

【伊澤委員】今の齊藤委員のご発言のご趣旨は、④のところで表現されているということですね。そういう理解でよろしいかと思うのですが、その前の北澤委員の、②に先ほどの表現を補足して、何か④に対する相殺効果のようなもの……

【齊藤委員】そうなるのだったら②には書かないで……

【奥村会長】そうならないようにしなさいというのが齊藤委員のご発言なので、ですから、④の効果が相殺にならないような表現を入れてほしいというのが北澤委員のご意見ですね。それは、そういうことでよろしゅうございますね。

【北澤委員】齊藤委員のおっしゃるとおりだと思います。今、JSTではそのところをフォローアップするように、例えば地球シミュレータなどでもユーザーを組織して、それでプロジェクトを作るといったこともやっておりますが、やはり今から人材育成もやっておかないと、そのときになってプロジェクトを作っても間に合わないということがありますので、スーパーコンピュータがこの頃できるのだというようなことを考えながら、今から教育もしていただきつつ、そしてそのときに、7ページの②を見ていただきましても「アプリケーションの拡大を促進するための取組を、ハードウェア開発及びソフトウェア開発と並行して計画的に実行すべきである」という文章が入っておりますので、そ

の前に、その時期に向けて教育をやっていけるということを入れていただくと、その両者がきちんと入るのではないかなと思われるのですが。

【奥村会長】何かいい表現をご提案いただくと。先ほどの④の効果を相殺しないで……

【北澤委員】④にも一番上に「活用する人材の育成や、」ということで教育のことが入っておりますが、それとややニュアンスが違う形で②ができ上がっておりますので、②のアプリケーションの前に「関連分野の人材育成を積極的に図りつつ、」といった文章を入れていただければ、それでその両者が強調される形になるのではないかなと思われるのですが。

【奥村会長】齊藤委員、いかがですか。

【齊藤委員】「関連分野」というのはちょっと漠然とし過ぎて、誤解を招くおそれがある。ですから、例えば「活用の観点から」……。要するに、その人達はスーパーコンピュータのことを本当に知らなくてもいいはずなのです。ですから、活用の観点からそれぞれのアプリケーションの問題を数式化するとか、そういうようなことが彼らに期待されることであって、それをスーパーコンピュータに乗せることは、本当はそういうアプリケーションの人達には時間の無駄なはずなのです。

【原山議員】人材には2種類あると思うのですね。本当にユーザー側の人材と、スーパーコンピュータを活用する際にサポートしてあげる人材があって、両方とも教育しなくてはいけないし、育成しなくてはいけない。「活用する人材の育成」と言うと両方入ってしまうので、齊藤委員のおっしゃるのは後者の方も必要ですよ。そしてユーザーに関しても育成を考えますという2つの視点をうまく入れる必要があるのではないのでしょうか。

【齊藤委員】後者も必要なのではなくて、後者の方が重要である。本当は両方大事なのです。ただ、今までは後者については全く無視されていて、それが日本のスーパーコンピュータを決定的に駄目になっている。それに対する反省がないのです。アプリケーションの人達は、自分達で問題を解きたいから頑張ってるんです。だけれども、それは非常に時間の無駄ですよ。それもやるべき——それは時間の無駄をどうやって減らすかということについて、本当の専門家、多数のアプリケーションを扱える専門家を養成し、その人達にサポートメンバーとしてきちんと活動してもらおう、それが日本には今まで全くなかった。何回言ってもできないことであつたのです。

前者の方、本当のアプリケーションの人達は本当に熱心な方々で、今まではそれが補っていたのです。それに甘えてはいけないということが、私が言いたいことです。放っておくと甘えてしまうのです。今までそれで失敗していたのですから。ですから、それももちろん必要です。けれども、本当のサポートメ

ンバーを作ることをサボらないような文章にしていきたい。

【奥村会長】④の方は、これでいいのですね。

【齊藤委員】結構です。

【青木委員】④のところなのですが、これは後で一人歩きする文章だと思いますので、ちょっと落ち着いて読みますと、私としては、今の議論を踏まえますと、1行目の終わりから「本システム完成後の運用・サポートに係る体制整備は、」という言葉があります。この「本システム完成後」という言葉は多分「運用・サポート」にかけるつもりでお書きになっていらっしゃると思うのですが、都合よく読む方は「本システム完成後に体制整備が行われる」と。だから「本システム完成後の」という言葉が「運用・サポートに係る体制整備」にかかっていってしまうのですね。これだと、このコメントを受け取った方としては、完成後の体制整備を考えれば良いというように受け取る可能性は非常に高い文章なのですね、日本語として。ですから、誤解を受けない文章にしなければいけないと思います。今の議論ですと、サポート体制も同時にきちっと検討した上でこれを進めてほしいという意見だと思うのですね。ところが、これを都合よく読み取る人にとっては、完成後に考えれば良いのだと受け取りかねないので、その文章をちょっと工夫していただければ大変ありがたいと思います。

【齊藤委員】それは「完成後」を取れば良い。

【伊澤委員】私もそう思います。「本システムの運用・サポートに係る」ということでよろしいのではないのでしょうか。具体的には「完成後」という3文字を削除する。「本システムの運用・サポートに係る体制整備は、」

【郷議員】④は今のご議論、私もサポート体制が必要だということはよくわかりますし、そのとおりだと思いますが、②の方は、先ほど北澤委員がご指摘くださった「大学・企業等のニーズを把握し、」の後、アプリケーションの前に、せっかく高速の素晴らしいコンピュータを開発するわけですから、新しい領域にこのコンピュータを活用していく、そういった創造的な仕事をする人材が育つような仕組みを併せ持ちながら、そしてアプリケーションの拡大を促進する、そこに1つ人材養成がいるのではないかと思っています。これはまた別のことで、サポートをする体制と同時に、やはり研究開発をする人が必要だというふうに、②と④では別のことを言っている形にした方がよろしいかと思っています。

【奥村会長】適切な短い表現を具体的にお願いしたいというのが、「関連分野」というご提案に対して、やや表現として明確さに欠けるのではないかというご指摘があって、もう少しスペシファイされたような一文が入れられると北澤委員と同じご趣旨かと思っていますので、それをご提案いただきたいというのがお願いなのですが。



【薬師寺議員】齊藤委員、④で重要なのは、本システムの運用・サポートに係る体制整備が重要だということですね。「スーパーコンピュータを活用する人材の育成や、」というのが出だしに冠言葉のように入っているから、さっきの育成の議論の中で、②の方で少し育成の話をして、ここで重要なのは、齊藤委員が言うような本システム完成後の運用・サポートがともかく絶対的に重要だと、もうちょっとそこだけを強調するような④にして、人材の育成は②の方に、それに向かった人材の——そのときには、サポートに係る体制整備も含めてというのは、また繰り返し言うておけばいいじゃないですか。

【齊藤委員】私、今の北澤委員の話で「関連分野を」というのをもう少し……、例えば「アプリケーションの知識をスーパーコンピュータの活用に結びつけるような人材育成を図りつつ」とか。「ような」はとってもいいです。「結びつける人材」難しいな。

【郷議員】私、ちょっとニュアンスが違うのですがけれども、アプリケーションの知識をとというよりは、新しい領域を開拓するような人を育成することが、このコンピュータを本当の意味で活用するために必要ではないかと思うので、「アプリケーションの拡大」の前に「新たな領域を開拓する人材養成を図りながら」というのはどうでしょうか。

【齊藤委員】それで結構です。

【郷議員】そういたしますと、続くような気がいたします。

【北澤委員】はい。

【奥村会長】ただいま具体的なご提案がありましたけれども、いかがですか。

【伊澤委員】結構だと思います。

【奥村会長】④との関係では。④の冒頭、先ほど薬師寺議員からご提案がありました。ここでは「スーパーコンピュータを活用する人材の育成」という言い方になっているのですが、ここの表現と、ただいまご提案のあった「新しい領域を」という表現。これは相互関係がわかる内容ということによろしいですか。

【伊澤委員】私は結構だと思います。

【奥村会長】他の委員の方、ただいまのご提案に関していかがでしょうか。

【本田委員】①から⑤まで、頭に何もなくてスッと文章が入っておるから非常にわかりにくいと思うのですがけれども、例えば②でしたら、1年前にあったときのように、一番の問題は、ハードはできたけれどもソフトができていない、どういう運用をするのかまだ決まっていない、そういうところが課題であるという指摘があったと思うのですがけれども、それと同じで、ここでも、見ていますと完成したシステムの活用についての検討が必要であるとか、下から5行目には「研究開発課題を明確にすべきである」ということで、ここではこういうふ

うなハードも大事だけれども、それをどう運用するか、どういうふうにやっていくかという研究課題をはっきりして、システムの成果を出すことが重要であるというのが②だと思うのですね。

④は運用についての人材のところなので、それぞれ別々の項目立てでいいのではないかと思うのですけれども、今、②にも人材のことを入れるとなると、むしろシステムの活用のことであるとか研究開発課題を明確にするということがだんだんぼやけてきてしまうのですね。そういう観点で、②と④ははっきり分けた方がいいのではないかと思うのですけれども。

【奥村会長】新たなご提案がございましたが、本件に関して、他にご意見いただけませんか。

【青木委員】②ですけれども、私は今、議論になっているあたりの文章を最初に読んだときに、自動的に頭の中でこういう読み取り方をしました。「関係府省とも連携し、エンドユーザーとなる大学・企業等のニーズを把握し、」そのニーズを活用に結びつけるアプリケーションの拡大を促進するためと、最初そのつもりで読んでいたのですね。アプリケーションのところはそういう言葉を省略しているのだと。今、いろいろな議論の中でこの間に別の言葉が入りました。そうすると、自動的に入っていた言葉が消えてしまって、すごく気になり始めました。間に別の言葉が入りましたので、「ニーズを活用に結びつけるアプリケーション」という言葉を入れないといけないのかなというのが気になります。

【奥村会長】大変重要なご指摘をいただいているのですが、調整案でもごさいませんが、ご提案させていただきますと、②がなぜここで特出しして指摘されているかというのと、先ほど本田委員からございましたように、やはり何をするためのスーパーコンピュータであり、そのためにソフトウェアとしてはどういうことを対象に進めていかなければいけないのかということの重要性を指摘した章であるわけです。一方、人材育成も極めて重要な視点でございしますので、その件については、④に先ほどご提案いただいたような趣旨の文章あるいは文節を入れて、分けたらいかがでしょうか。人材育成の件とソフトウェアの研究開発課題を分けたらと思いますが、いかがでございましょうか。ご提案いただいた郷議員並びに北澤委員のご意見を賜りたいと思いますが。

【齊藤委員】今の会長のご意見に賛成です。というのは、ここで別々に書いてあると、アプリケーションの人材とサポートの人材が混同されるおそれがある。これ「のみならず」とか「及び」といった係辞を入れて、この2つは違うということを明確に④に書き込むのが、より明確だと私は思います。

【郷議員】私も、その方が2つの人材養成という意味ではっきりするかと思えます。ただ、ソフトウェアの開発をやる人がたくさんいなければ、ハードウエ

アだけでは成り立っていかないというところを強調するのには、②の方が良かったと思っておりますが、もう一回ソフトウェアの開発ということで繰り返すことがあるかもしれませんが、そこはメンテナンスなどと研究開発の二本立てにして、④の方ではっきりと段落を分けるなどして書くことは可能かもしれません。

【奥村会長】例えば「スーパーコンピュータを活用する人材の育成」というのは、やや一般的な表現にすぎるだろうと思うので、ここに、仮にそうかもしれないというご提案をしますと、「スーパーコンピュータを活用して新しい研究領域を開拓する人材の育成及び本システムの運用・サポートに係る研究体制整備」というような文節にしたら両方の趣旨が並び立つように思いますが、いかがでございましょうか。

(異議なし)

【奥村会長】座長はよろしゅうございますか。

【伊澤委員】結構です。

【奥村会長】それでは、本件につきましてはそのように修正させていただきたいと思えます。人材育成は大変重要な点でございますけれども、この報告書(案)について、その他の視点でのご意見等ございましたらお願いいたします。いかがでございましょうか。特にご意見等ございませんでしたら、先ほどの部分を修正させていただき、専門調査会での検討結果とさせていただきたいと思えます。

本件につきましては、伊澤座長を初め評価検討会にご参加いただきました専門委員の方々、並びに、今日をご出席いただいておりますけれども検討会にご出席いただいた外部招聘の専門の先生方、まことにありがとうございます。私から改めて感謝を申し上げたいと思えます。

ところで、この評価専門調査会の評価結果として、この報告書をまとめるわけでございますけれども、この後、総合科学技術会議の本会議に本内容を報告し、審議を行い、正式にご決定いただいた後、関係大臣、具体的には文部科学省等になりますが、意見具申することになります。この手続につきましては、私にご一任いただきたいと思います。それでは、本件につきましては以上で終了したいと思います。どうもありがとうございます。

#### ○大規模研究開発の事前評価のフォローアップについて

【奥村会長】引き続きまして、大規模研究開発の事前評価のフォローアップについて、ご審議いただきたいと思います。資料3-1でございますけれども、本件につきましてもヒアリング等を行って、また、各委員の皆様からご意見等

をいただいていたわけでございますけれども、本日そのフォローアップのまとめを行うことにさせていただきます。2件用意してございますけれども、1課題ずつご確認をとっていきたいと思います。それぞれ約20分程度で進めたいと思います。最初に、X線自由電子レーザーの開発・共用について、事務局からご説明申し上げます。

<事務局から資料3-1に基づき説明が行われた。>

【奥村会長】本件につきまして、ご意見等ございましたらお願いしたいと思います。

【北澤委員】私、今、文部科学省のナノテクノロジー材料委員会の委員長をやらせていただいておりますので、その立場から申し上げさせていただきますのですが、実はナノテクノロジーは、21世紀に入って世界のR&Dがメガコンペティション時代に入ったという典型例に挙げられておりまして、それは例えばどういふところにあらわれているかということ、各国のナノテクノロジーの総予算は、いつも日本とアメリカとヨーロッパと比べながら審議される、そういう状況になってきたわけでありまして、しかし、よくよく見てみると何か足りないと思っているところがありまして、それは例えばどういふところかということ、アメリカや韓国、それからヨーロッパでは、ファウンダリーといひまして、ナノテクの超微細加工ができるような工場施設というのですかね、そういったものを各大学に設置しているわけです。その規模が大体100億から300億円なのですけれども、そのお金が何か日本で足りないなと思っておりました。

それで、日本のナノテクの予算は何で多いのだろうと思っていれば、実はこのX線自由電子レーザーがナノテクの予算の中に入っているということに気がつきました。私どもとしては、この自由電子レーザーは是非応援したい技術ではあるのです。応援は是非したいと思うのですけれども、それがナノテクの予算だと言われると、実はナノテクの予算は、ナノテクの方では予算請求しないでくださいというようなことになってしまう。これで本当にヨーロッパやアメリカあるいは韓国、そういったところに日本のナノテクは対抗していけるのだろうかということにおいて、甚だ私としては責任を感じておりまして、今日もここでは「ナノテク」とは何も書いていないのですね。大規模研究開発の事前評価と書かれております。そうしたら、もう大規模研究開発というカテゴリーでいいのではないかと、これはナノテクの中に統計上、入れ込むという操作は必要ないのではないかとと思うのですが、いかがなものでしょうか。その点についてのご質問だけさせていただきたいと思うのですけれども、これは特にこちらでは入れておられないわけでしょう。統計上。総合科学技術会議で、ここで

は大規模研究開発ということで、この評価をやっておりますよね。

【天野参事官】まさしくこの評価専門調査会における大規模研究開発調査につきましては、そのプロジェクトごとでの判断、予算額でございますとか、あるいは国家基幹技術として重要かどうかという観点でやってございますので、その分野にどういうふうに関係するかということとは直接……

【北澤委員】ここで判断しておりませんよね。

【天野参事官】はい。

【北澤委員】わかりました。それでは、文科省の中でさらに協議してみたいと思います。ありがとうございました。

【奥村会長】この分野は、ナノテクの8分野の方では挙がっているわけですね。それはそういうご認識でよろしいですね。

【北澤委員】ただ、例えばアメリカなどでも自由電子レーザーの研究開発とか、そういうものはあるのですけれども、そういう予算は、アメリカではナノテクの予算になっていないのです。日本はナノテクの予算になっていますから、もうアメリカと、これで大丈夫だというような感じで比べるときに非常にバランスが悪くなってしまふ、そういう問題なのではけれども。

【小林委員】4ページの①、なお書きのところですがけれども、この書きぶりが余り明確ではないように思えまして、「その研究成果の社会・経済への波及効果についての説明を、研究開発の推進と並行して文部科学省においても戦略的に取り組むべきである」と書いてあるのですが、この部分は多分、なされたご意見からすると、投資に対して、インプットに対して明確な成果の見通しとか、具体的な記述がないということのように思えるのですね。ですから、成果についてももう少しいろいろ明確にするような努力をしなければいけないということをもう少し強く表現された方がよろしいのかなと思いました。それは資料3-2の、1の右側の欄の真ん中辺でもそうですし、追加意見等のところでも、その2つご意見がありますので、その実現可能性といいますか、どういうベネフィットがあるのかということについての明確な説明責任を負うのだらうと思われまますので、書きぶりをもう少し工夫した方がよろしいのではないかと思います。

【奥村会長】何か具体的なご提案をいただけると大変ありがたいのですが。

【齊藤委員】(1)のところにライフサイエンス、ナノテク、材料分野と書いてありますね。こういうところで役に立つのだと書いてあるので、今、小林委員がおっしゃったところもそのところをもう少し、ナノテクでは何ができる、ライフサイエンスでは何ができると期待されることを具体的に、嬉しさを書いていただけるといいのではないかと思います。再びナノテクで北澤委員が嫌かもしれませんが、ナノテクというのは重点分野で、その枠組みの予算の中に入

っているのだから、もう予算ができた時から決まっているので、今さら北澤委員が言ってもだめだと私は思います。

【青木委員】1つ前に出た意見には私も大賛成なのですが、①のなお書きのところを読むと、やはりぼんやりしているのですね。実際に私どもがヒアリングで聞いたときは、具体性を持たない、実際にどう活用されるかが非常に弱いと感じたわけです。ですからそのところを、先ほど検討したのに近いかもしれないかもしれませんが、例えば「産業界の具体的なニーズを把握した上でこれをやってほしい」という気持ちをしているのですね、私は個人的に。皆さんどう思うかわかりませんが、絵空事に終わらせないようにするには、やはり産業界の具体的なニーズを把握した上で、この計画をきちっと立てて戦略的に取り組んでほしい。そこを切り離して、X線レーザーはこんなにいいものだというところだけを謳ったのでは、やはりちょっと力がないというか、そういうところを私はちょっと感じているのですね。

【奥村会長】先ほどの小林委員のご意見と、ある意味では趣旨が近いというご理解でよろしいですか。もう少しきちっと、具体的な説明が要るのではないかという内容だろうと思いますけれども。

【原山議員】この文章をそのまま読むと、波及効果についてはもうわかっていて、説明を戦略的に取り組むべきと書いてあるのですね。期待するのはそうではなくて、中身は何なのかということをお聞きしたいので、波及効果を明確にした上で、さらに説明しなさいという形にしたらいかがでしょうか。

【奥村会長】2つをきちっと分けるというご提案ですね。

【齊藤委員】これは私もヒアリングした結果、青木委員がおっしゃったとおり、何に使うのかがちゃんと説明されなかったと思うのですね。これはある種のX線を作る、作るというのは要するに未踏領域なので、それができたときに一体どういう物理現象が観測されるかは、作ってやってみなければわからないところがあって、その結果、何かが期待されるので、つまり未踏領域で、例えばナノテクでもライフサイエンスでも、今までそれを見る光がなかったから見えなかったものが見えるようになって、その結果、何がどういうふうに関に立つかは見てみなければ分からないというのが、これの正直なところなのではないかと私は思うのです。だからはっきり言えなかったのですよね。でも、分からないからといって一概に要らないと決めつけるようなことでもないように思うのですね。だからそのところ、何かがやりたいから、産業上、有益なことをやりたいからということでは、なかなかここは……。何か書いてもいいですけども、書くときと嘘になる。そういう意味で、産業上、嬉しいことなんて余り書かない方が自然だ、でも重要だというふうにここで認識していただければ、そういうふうには書けばいい。そんなのは贅沢だからやめろというなら、やめろ

と書いてもそれはいいと思いますが、私は、なおそれでも……。

ナノテクだって、今は役に立つとみんな思っているけれども、多分5年ぐらい前は「そんなの何の役に立つのだ」と思っていた人が多くて、しばらくやっているうちに何か嬉しいことがわかってくるということなので、そこで余り短絡的に「産業界の」とかいう言葉をここに使わない方がいいと私は思います。

【北澤委員】青木委員が言われたように「何の役に立つかわからない」というほどのことではなくて、X線レーザーができればどういうことができるというのは、もう相当に分かっておりますので、これはむしろ是非並べていただければいいと思うのです。タンパク質の構造解析とか、そういったことにも非常に大きく役立ちますし、これはツールとしては非常に役立つことがたくさんありますから、並べていただけるし、予測もできていると言っているかと思いますが。

【齊藤委員】科学技術上は非常に重要なのですよね。産業界にどうだというのは、それが書ければ最もいいのですけれども、そこまで要求しなくてもいいのではないかと。

【青木委員】了解しました。

【奥村会長】そういう意味で、冒頭の研究開発の概要のところに記述されていますように、このチームの性格が分かっていますので、このチームが入手できればどういうことが見えるかということは、この最初に書かれているわけですね。この結果、従来予測もしないことが出てくるかどうかまでは分からないという性格のものだろう。従って、齊藤委員のご指摘のように、何が出てくるかわからないところを産業界のニーズにまで結びつけるのは、やや無理があるのではないかとというのは、そういう意味合いでおっしゃったのだろうと理解しております。そういうことで、青木委員、よろしゅうございますか。

【青木委員】はい。

【奥村会長】そういたしますと、①のなお書きのところは、やや一般的に書かれ過ぎておりますので、ここで再度、要するに「研究成果については、研究の提示や研究成果の社会……」今ちょっと文章ができ上がらないのですが、まずはこの研究概要で書かれているようなナノテク関係のことをきちっとやって、学術成果を上げるということを記述し、さらにその知見が得られた段階で社会・経済への波及効果について国民に説明していく、そういう段階を追ったような表現を①のなお書きのところに入れさせていただいたらいかがでしょうかという折衷案をご提案申し上げます。文章そのものは今すぐできないので恐縮ですが、そういうことを入れさせていただいて、よろしゅうございませうか。

【小林委員】今のご提案で結構ですが戦略的に取り組むというのは何に取り組むのかということに私はちょっと引っかかかっていまして、波及効果を視野に入れながらということか、戦略的に研究開発を推進していくという方があるべき姿

ではないかと思うのですね。その上で説明責任を果たしていくということだと思うので、戦略的に取り組むべきことは研究開発の推進だというふうに書いていただきたいと思います。

【奥村会長】 それでは、申し訳ありませんが、ここの表現は、今のようなご趣旨を踏まえて書き直させていただきたいと思いますので、お任せいただきたいのですが、よろしゅうございましょうか。

(異議なし)

【奥村会長】 ありがとうございます。本件につきまして、他の部分でご意見ございますでしょうか。

【中西委員】 今のことにも少し関係あるのですが、結局、これだけの巨額をかける価値があるかどうかの評価のポイントだと思います。総合科学技術会議でも300億円以上、一定の額以上の評価をしているように、予算額の規模からの具体性を詰めた方が良いと思われれます。ですから、波及効果について、「何もできる、何もできる」というのではなく、まず、できることを全部書き並べて、その上で評価をすべきではないかと思います。基礎研究を額に換算するのは難しいことですが、工夫していくことも大切だと思います。そういう点から見ると、運営・評価体制ですが、推進協議会はあるのですが、評価についての部署が少し弱いように思われれます。国際アドバイザリーボードは本当に大まかなところ、全体的な視点から評価をするのではないかと思います。それも必要ですが、ほとんどは推進に関するところを行い、評価をするところは課題の選考評価のところかとも思われれます。ですから、最初に目指したもの、何もできる、何もできると全部書き並べたもののうち何がどうなったかということを実体的にフォローするような仕組みを作ることも大切だと思います。

これで十分できるというのでしたら、それでも結構なのですが、運営評価組織の体制のところには何か、ひと工夫あればもっとうまく進むのではないかと考えております。

【奥村会長】 ただいまのご意見に関して、他の先生方からご意見ございますでしょうか。ただいまの中西委員のご意見に関して、5ページの③のなお書きのところを、どう言いましょうか、中西委員のご趣旨に合うように表現し直すということではいかがでしょうか。輩出することが期待されることから、テーマの選定とその評価、その研究成果の具体的な活用というのでしょうかね、そういった表現をここに入れることについては、つまり、利用研究の推進についてが③全体なのですね。④の運営・評価組織の体制については、どちらかというところと装置の評価といいますか、運用が中心に記述されている項目で、今、中西委員がおっしゃったのは、どちらかというところとそうではなくて、その設備を使った研究の中身、それによる波及効果を重視されているご発言だと思いますので、



③の方に肉付けしていただく方がよろしいかと思うのですが、いかがでしょうか。

【中西委員】結構でございます。

【奥村会長】何か具体的なキーワード等ございましたら、ご提案いただけましたら。「広範の科学技術の発展に貢献し、最先端の研究成果を輩出すること及びその研究成果に基づく社会、経済への波及効果について具体的に……」どうでしょう。要するに、研究課題を実行し、かつその内容を評価してフィードバックして回しなさいということがご趣旨だと思いますので、このなお書きのあたりの文章を今のご趣旨に沿うような格好で変えさせていただく。他の委員の方、今のご提案に関していかがでしょうか。

【薬師寺議員】それでよろしいのではないかと思います。多分、中西委員のおっしゃるニュアンスみたいなものは、税金を出す国民から見ると、我々はこのものをオポチュニティコストと言うわけですが、他のものではなくて、なぜSPring-8の先の自由電子をやらなければいけないのか。つまり、それだけのお金があったら他のことをやらないで、なぜこれをやらなければいけないのかということですよね。ですから、これをやると原子イメージングとかそういうものが出来るわけですけれども、それで科学が進歩する、それは日本にとって重要なことであるといったことがないと。そしてペタFLOPSの方は応援団もたくさんあって、これは日本は先を行かなければいけないということで、それは安全保障上いろいろなものが入る。そして日本の計算機能力とか人材、それから齊藤委員がおっしゃったような、今度は違う組織を作って人材を養成していくのだと。これはそれなりのミッションプロジェクトとしてわかり易い。

この場合には、常に総合科学技術会議でも議論があって、これは動かすことにしたのですけれども、やはりSPring-8をやって、また自由電子化というときに、もう少しオポチュニティコストで、これ以外のものではなくてこれをやるのだというところを明確にする必要がある。経済学的な意味から言うと、そういう議論ではないかと思うのです。ですから、奥村会長が言うようにその辺を国民の前には、やはりこれをやることによってどういうことが、国民にわかり易い、原子イメージングとかそういうようなものが理解されるかです。でも、国民から見るとSPring-8は非常に頑張った、タンパク質分析などはよくやった、なぜ自由電子をやらなければいけないのか、こういうことはどんどん私達から離れていくというようなイメージがあるのです。他のものをしてあげたらわかり易いだけでも、これをやる以上、国民のためにはその説明が、これだけのお金を使ってやる必要があると。多分そのようなことだと思います。

総合科学技術会議でもいろいろ論争がありました。反対の強い意見もありました。でも、これは動かすことになっていますので、それはそれなりのプロセ

スですので、やはりもう少し、利用とか何に使えるとかそういうことではなくて、国民にとってみればこれが重要だというような簡単な文章があるといいと思います。

【原山議員】国語の問題だと思うのですが、5ページの③のなお書きのところは「これらを推進するため具体的に取る」と書いてある、「これら」というのは個別利用研究ですよ。個別利用研究を推進するために、では何に具体的に取るのか、もう少しシンプルに書いてもいいのではないかと。

【奥村会長】そういう意味で、このなお書きのところは、先ほど申し上げましたように、文章全体の構成を変えさせていただこうというご提案を申し上げました。研究成果の話と、その結果を用いた経済・社会波及効果をきちっと分けた格好で、研究成果について、まずはきちっと戦略的に取る。この設備は、このページの最後にも出ていますように、とにかくSPring-8のような優れたX線のビームを持ち、なおかつ自由電子レーザーのところは世界にないわけですね。従って、まずそこをきちっとやろうというのが今回のフォローアップの基調になっているわけですね。ですから、それに合わせる格好で、今のところも全体といいますか、なお書きのところを修正させていただこうということで、今の先生のご指摘も、その中へ取り入れさせていただこうかと思えます。

【本田委員】前回欠席したので少し分からないところもあって、変な質問かもしれませんが、資料3-2の追加意見のところ、完成した後の維持管理費というご質問が出ていますよね。それで年間40億円だと出ています。これは基本的には計測機器だと思いますけれども、このレーザー装置は何年ぐらい耐用年数があって、維持管理するためにどのぐらいの費用が必要で、人件費であるとか設備費であるとかメンテナンス費であるとか、いろいろなことがありますね。また、実際あるものを測定しようと思ったら、その測定するために予備的に何かを作らなければいけないと思うのです。そういう費用も全部入れてどのぐらいかかるのか。もっと言ったら、これは国の持ち物であって、それを使う人はただで使えるのか、使う人からお金を取って、収入があって支出があってというようなバランスなのか、そのようなバランスシートのものがあるのでしょうか。

【天野参事官】これに関して7月5日にご説明いただいた資料は机上にございますけれども、その関係の資料自体は入っておりませんでした。

【本田委員】逆に、そういうものはなくてもいいわけですか。これからできた後、運営していくのに。例えば今、SPring-8などは、物によっては1日貸していただくのに100万円とか200万円かかる。ある商用途であれば無料でもいいとか、かなり幅広い運用の内容があると理解しているのですが、これができた後はそういうふうな、いわゆるお金の出入りのバランス的なこと

は考慮しなくてずっと運営していけるのでしょうか。当初からしっかりしていくべきではないかという気がするのですけれども、それはいいのでしょうかというご質問です。

【奥村会長】5ページの④で、そういった完成後の運用体制については検討することになっていきますので、全部がただになるとかそういう話は全くないわけです。当然それに準じて制度設計されていくことになるだろう。これは想定ですけれども。

【本田委員】これは体制ですよ。私が言ったのは具体的なお金の話なのです。それが体制の中に入っていればいいのですけれども、運営するに当たってどのぐらいのお金がかかって、どれぐらい入ってくるとか出ていくとか。それが十分になれば運営していけないですよ、結果としては。作るときのお金はよく議論されるのですけれども、作った後のお金というのは意外と議論されずに、後になってうまくいかないというのが我々民間でもよくある。そういうご質問なのですけれども。それについてはもう十分に議論された上で、すみません、私も前回休んでいましたので、今、会長がおっしゃったように④の中に入っているというのであれば、私はそれ以上ごさいませんけれども。

【奥村会長】私が申し上げているのは、十分に確認とれた数字が入っているということを申し上げているのではなくて、それはその時点での予算要求等、具体的な手当てが必要になってきます。今、分かっているのは概算で約40億円ぐらいかかりそうだということを含めて、このプロジェクトを推進するかどうかというのが議論の対象になっているわけで、そのことが予算的に十分担保されているという意味ではないと私は理解しております。従って、詳細な検討は必要になります。

では、本件に関しては、先ほどの2カ所の文言を変えさせていただくということでもよろしゅうございましょうか。まことに僭越ながら、文言の修正についてはご一任いただきたい。できるだけ先生方のご趣旨に沿うように努力してみたいと思いますので、よろしくご理解いただきたいと思います。

それでは、もう一件ございます。戦略的基盤技術高度化支援事業、担当府省は経済産業省でございますが、これについてのフォローアップ結果について、最初に事務局からご説明申し上げます。

<事務局から資料3-1に基づき説明が行われた。>

【奥村会長】本件に関しまして、ご意見等ございましたらお願いしたいと思います。

【中西委員】コメントに書かせていただいたことはほとんど取り入れてくださ

り、かつ非常にいい内容と思います。②の優れたテーマ及び研究チームの採択でございますが、なお書きのところで「中小企業が主体となる、優れたテーマや研究チームが採択される」というのは、そのとおりだと思います。ただ、その上の方で審査の着目点や審査プロセスに触れられています。これもいいと思うのですが、特に中小企業からのテーマについては、過去に優れた業績がなくても将来期待されるキラリと光ったものを選択していくわけです。ですから「柔軟性を持つ」と書いてあるので、これで読めればいいのですが、審査の着目点や審査基準をあまりきちんと決めてしまうと柔軟性が本当に持てるかどうかということになります。また継続的な事業となりますと、つい審査基準は昨年のおりとなっていく傾向もあり、さらには、とかく同じ課題が継続して採択されがちなこともあります。つまり、新しいものが入りにくくなるような要素があると思われますので、審査の基準や審査設計についてはしっかり柔軟性を確保するという点に気を配ることが一番大切だと思います。

【奥村会長】他にご意見ございますでしょうか。

【田渕委員】8ページ、①のなお書きの部分なのですが、前回質問させていただいて、「戦略的な基盤技術の選定に当たっては、引き続き」この「引き続き」というところにちょっと引っかかります。というのは、どういう基準で選定しているのか質問させていただいたところパブリックコメントや要望が主だったのですね。さらに、そうした形でニーズを把握した後の検討のプロセスが全く見えていないのですね。要するに、パブリックコメントと要望だけで、そのままそれがストレートに反映されてしまっはまずいわけで、その中できちんとした検討をした結果があって初めてそういった反映がなされるべきだろうと思うのですね。その辺のところが見えないまま「引き続き」という形のコメントが入ると、前のままでいいということになってしまいますので、前のプロセスをきちんと検討した上でのものであれば「引き続き」でいいのですけれども、そこが見えないままに「引き続き」は、ちょっとまずいのではないかと。

【奥村会長】今の先生のご意見ですと、「引き続き」を消すということによろしゅうございますか。

【田渕委員】そうですね。「その過程の公平性及び透明性の確保を図るべきである」と、そのままストレートに書いていただくと。

【古川委員】それは随分意味が違ってしまわないですか。「引き続き」を取り除くと相当意味が変わりますよね。ということは、これまでは公正、透明でないと読めますよね。私はそういうふうに考えていませんので、これはそういうことではなくて、今までも透明であったけれども、それを担保した上でさらなる改善をする、そういう趣旨のことを言いたかったのではないかと思うのですよね。ですから、単に「引き続き」を取り除くのはとてもおかしいと思

います。

【田渕委員】パブコメと要望を取り入れているというのは、それはそれでいいことだろうと思うのですが、それがそのままストレートに出ていってしまっているのであれば、それは問題で、そのところがきっちり議論の中でされているということであるならば、引き続きという形でもいいと思いますし、そのあたりのところが実際にはいかがなのか、確認させていただいてよろしいでしょうか。

【古川委員】この文章を読むと、②の2段落目に「審査・採択のプロセスにおいては、複数の外部審査委員によるピアレビューや、外部有識者等により構成される採択審査委員会……」というのがあって、それできちんと選択している。これはその前の大型のプロジェクトとは違って、大型でも1億円、実際は数千万円という2つの組分けのものを80テーマ程度総合したものですよね。ですから選択の過程も、先ほどのX線レーザーのような超大型のものとはやはり違うわけですよね。そういう意味で、②にきちんと書かれているからいいと私は判断しました。

【齊藤委員】今、お二方がおっしゃっていることはちょっと違って、②に書いてあるのは個別の課題で、それが幾つかの新しい分野を作ったのが①のな お書きの方で、私の印象でも、その途中でできた新しい分野がなぜその分野なのかという十分な説明は行われなかったと思います。その分野が決まった後、個別の採択については②で書いてあって、そこは透明に行われていると私は思います。

【田渕委員】私もそういうことで申し上げております。

【奥村会長】本件については大分構造の違う議論が出ていると思いますが、他の先生方、ご意見いかがでしょうか。それでは、また僭越ながら折衷案ですが、技術分野の選定に当たっては、全く議論しないでパブリックコメントと業界要望をそのまま鵜呑みにして選定しているということでは必ずしもないと思うのですね。従って、「引き続き」は消しまして、「この選定に当たっては透明性及び公平性の確保に常に留意すべきである」というような表現にしたらいかがでしょうか。それであれば古川委員ご指摘の懸念もなく、そして田渕委員あるいは齊藤委員のご指摘の趣旨も入るのではないかと思います。いかがでしょうか。

(異議なし)

【奥村会長】それでは、ここは今のよう表現に変えさせていただくことにしたいと思います。それ以外のご指摘、ご意見等ございますでしょうか。

【薬師寺議員】フットノートでございますけれども、経済財政諮問会議の骨太の中に、スモールビジネス・イノベーション・リサーチ——SBIIRというの

が入っております。経済産業省がこのプロジェクトのように、特に中小企業の研究開発能力みたいなものをこれまで非常に支援してきた。それは経済産業省型のS B I Rだと我々は理解していて、ただ、大田大臣が非常に熱心にやっているアメリカ型のS B I Rと、経済産業省型の大きなお金で、たくさんの中  
小企業にお金を投入するものがある。そういう議論があつて、現在、経済産業省もS B I Rの中できちんとやるということで、フィージビリティ・スタディなどもやって、そしてステージをきちんと議論しながらやっている。そして当  
評価委員会も含めまして、総合科学技術会議がきちんとそういうものを、その後、評価をする。そのようなことになっております。フットノートでございますけれども、そういう種類のものでございます。

【奥村会長】本件について他にご指摘事項、ご意見等ございますか。それでは、先ほどご指摘の表現を変えさせていただき、本件についてご了解いただいたものとさせていただきたいと思ひます。このフォローアップ案件2件についての今後の取り扱いでございますけれども、このような修正文言を取り入れた形で、科学技術政策・イノベーション担当の政策統括官名で、それぞれ文部科学省及び経済産業省にこのフォローアップの結果を送付し、当該施策について、その線に沿って実施していただくようお願いすることになります。また、このフォローアップ結果につきましては、公表することになります。そういう手続に入らせていただきます。

それでは、本日は3件、条件付でご了解いただきまして、まことにありがとうございます。なお、今後のこの評価専門調査会の日程につきまして、事務局よりご説明申し上げます。

【天野参事官】次回の評価専門調査会の予定について、ご説明させていただきます。議題といたしましては、平成20年度から開始される予定の大規模研究開発に係ります事前評価の対象の決定がございます。各省から概算要求が8月末に出ますので、それを踏まえて9月上旬には次回の会合を開催し、候補を決定したいと思ひます。財務省の予算査定の前には結論を出して、評価を仕上げたい。通常ですと11月の初めには事前評価を仕上げる予定にしてございますので、9月の初めにはその対象を決定させていただきたいと思ひております。

事前に先生方のスケジュール等も聞いておりますので、それを参考にさせていただきながら、また会長ともご相談して早急に決定し、またご連絡させていただきたいと思ひますが、9月の初めに事前評価の対象とすべき案件の決定、その他、今回はできませんでしたが、評価システム改革の推進についてもご議論いただければと思ひておりますので、よろしくお願ひいたします。

【奥村会長】大変慌ただしい日程で恐縮ですが、是非ともご協力をお願いいたします。他にごございませんでしたら、本日はこれをもって閉会とさせていただきます。

きたいと思います。ご多忙の中、お暑い中をご参集、ご協力いただきまして本当にありがとうございました。

—了—